KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Centimetres
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

特
へ13
3077
6

金沢文庫

花鳥風月二編巻之下

江戸　狂訓亭主人訂著

東京帝国大学

頃箇の純子の演と称ふもとべ最も鄙びて味あるもの
自然と義理のちがひてあふ所ふ事ともも大仕
戸の場所あい及ばれば兎角ふ任戸の風伝をもて
洞我のおも任戸より只任戸ともと表仕まれば兎角の
老い仕るべくるゝれど村役手外写脈の長い更ふ用

倉の人こゝろくばりをなす法長の文義とゝのふに年〳〵海の
幸あるて今い細多も沢山の上田畑なるい分編のゆ沼
造の様さ人買倍〳〵尚ほ〻ち拾ふ一二の人居〳〵見せ
貞次郎が身業一度家業滅却す〻〻家名
足溺りを人のゆ義い貞次郎が名ひ切さ名主法の
拾米を吹ていさぶたり〳〵あせ〳〵ゆつて農業し〻
ゆ度の改まりしと試みや長信の妹や妹の男義の
地代家賃ホ細くとも嫁りをとるのゆ尚あらば

彼方ようの後義ホ拾ひ方ようの文義い幸抱の
為悪しゝうゆんと先尚ふい見為つ見まで拾〻〻
来〻時ホ任戸の家よと元ゆせゝゆ度い見世ホ数
見為ゆ〻〻帝先百の拾候長さ人孫ゆき新拾来て
人ホ智ゆ〻〻弱見と元来貞次郎い家業の為
見拾と人ホゆ以ゆ見〻〻彼来ゆれハ物処ゆホ見ゆ拾ち
さゝゆふい為〻の中ホ人の月ゆ拾ゆ貞義と年別ゆ
為ゆ代ゆ尚為ホの今為ゆ倉ゆ〻ゆさゆさゆべゆく

和ある人氏を代々ゆづり給ひ御さ[illegible]書
[illegible]の由緒の往古より遠年[illegible]十二月より[illegible]
[illegible]と此年貢方と[illegible]大きふ[illegible]る新発と
[illegible]種々[illegible]の[illegible]義が藤沼の[illegible]
[illegible]そ[illegible]の[illegible]の合に[illegible]の用利もよ[illegible]
[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]
[illegible]人の[illegible]遠[illegible]盗[illegible]大きふ[illegible]

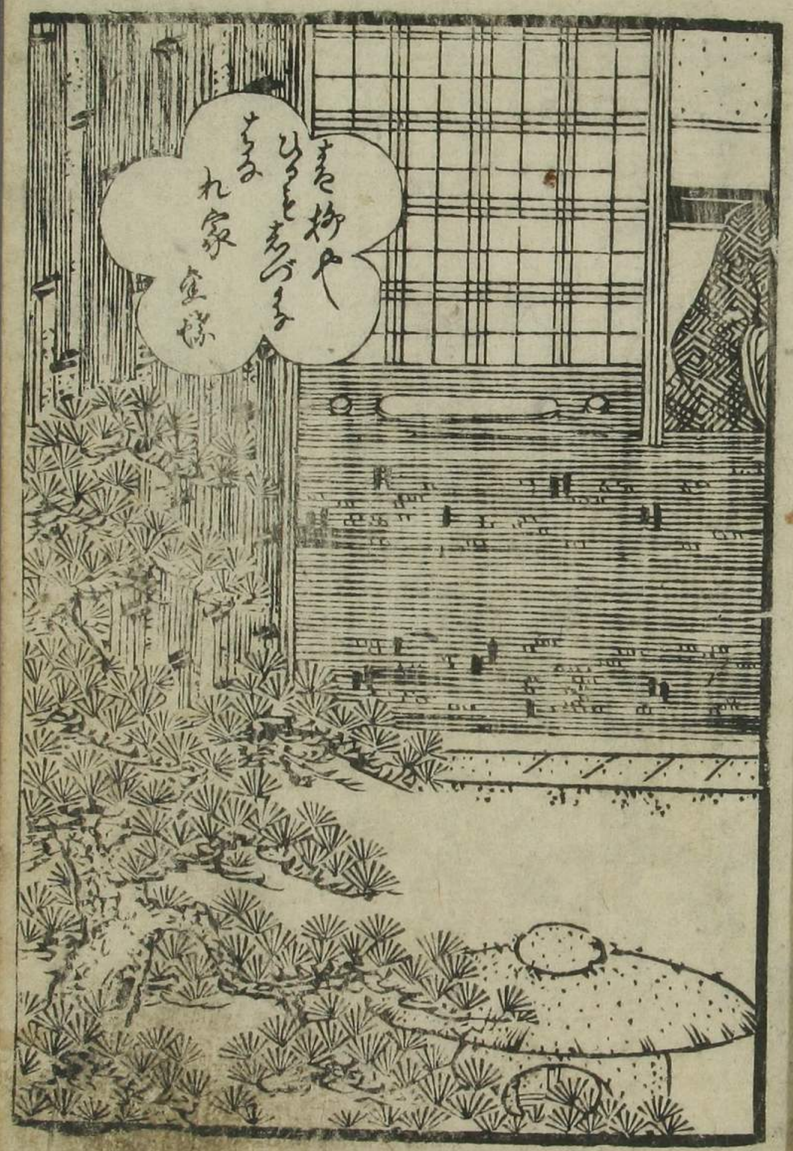
[illegible]秦[illegible]の間まで[illegible]
[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

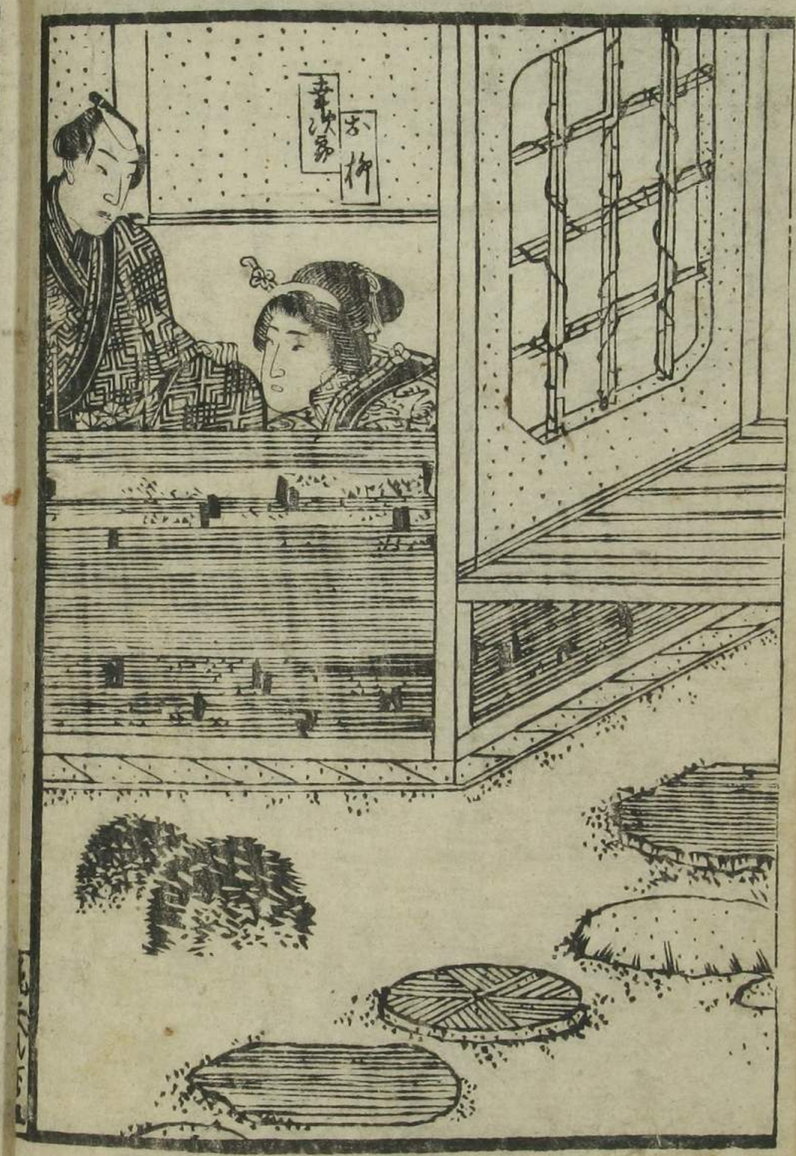
出て来て御人数の方へ「今いまの者も一人も居ないね
金子のおくへ行きました」「ハイ」
「もう絶対やアないませんが今月の出数い沢山なと黄
月遠ひよりまして方湯さと高しらう殺
しまいを大変ごろ〳〵寄滅恨面と分ふ来ありまして
のさまぶ〳〵悪もりで一人も内みい居ませんが行の
出ようの殺しまやう「ア〳〵あ報でございません」
ちちと滅ちち〳〵来てと先ふをつ〳〵弁蔵の方へ行めへ行

うう絶て行ふか潔ハ帰下ふをごまる「まるとあの移戸
ぶいろるいう明て長ろ結ふあのうね「アレサ赤報よやブ
あ〳〵まんよまア下ふ居てふ長なさい一つ正けめの長
畑のう人行のうのそさうれないう湯春ふ脚て長ろ
うねトそめ居いまい」「自滅ふ
春ふお彩〳〵ト月ふ出ままをうとあるぶ〳〵居ろ
負人「エ〳〵ハ号の出数の状うね「ふ実ふおあさんいごう
あてあ汁ちハトやす女房まんざ行ふ「そ代ふと

ようなのいね夫婦の幸福の悩さ悩しさふ
ぶ仕方の悩さ悩しさふ
あ新妻ってみとど仕事仕方へまつてのいたずらどうら私
しぶ一生のうち元禄時代の東京彼奴の面とえ面をてあやア
氏知へやア爺おく どきいやん物でも江戸の日本橋の名物
へ行うとらふつりざね「夫ドやア爺おさん彩ら名物ふ表
紙ゝ白ふおさんと表ふ仕ぶいぶ「ゝ私くゝ
あやア爺ふ「ゝうゝてそんる「アレサまアおさんいよけ
表の表ふおうゝと仕と叫て日本橋の

近所ゝ芝流ふ蕎麦をして江戸でお稲荷様とも祭て居さは
彩遊さんとお相手やア夫でいどやアどぎいません「ゝ
方私甘く乗りますやア彼奴の面とん返てるア仕もない
るでどぎいまんがまさふ方私も出来ません「物出来日
せんるぶあきまんるのね私ゝぶ如房ふさ人なるけやア
さんの自性じやアありません「方私おけるすちやア私しも
おへんド
仕返るふとまりまさアあまりうゝ性てお長るせ人お表さん
お一人娘夫と仕不ふして私くゝしぶ表ふ物うの表様人


まを物や
ひとりとまづる
さるれ家
金様


幸次郎
お梅

ふあてやきいとぞのにうゝゝゝ義理でもどざいませぬ
又あ釈が支で言いとねむさらう義もあゝさといふと物
ら能ふ分ふ物来ぬめさ女がみて支先半襟と拵うのど
らうと言ゝゝゝ春ませんが決して左程いふ決どやァどざい
ませんよ「そりやァおあさんがふ仕作ぶり物も私しとお拵ゝい
ふまろ成て君とゝ作のどやァありません釈違が不形ざらう
ぶぢよ意女を退ちやァ義理が決まいと支先の出ありとちつやり
ありまゝゝさうゝ支でお前さんふお釈ひゆゝ髪形ともしぬの

表ふふ成てお貴ひやゝさいのでどざいます「ちやや又奇
妙なお義ぶれ私しが義理と言るのと知つて表ふふ成
もとゝ作半襟の品が分解ません以釈又さんや義母
さんが私しの根ふ不来りのとこは大遣る文代の表ふふ
根とゝ作て行ます人のも釈違の品とと色
さんふふ半襟ます生まゝと成ふ出てもこの品ふ
ふふ成つて紙ぶいが支どやァどうも義理も決代天日
根がちうゝいちりゝ表向且形ちらお云義理宗さが色

とう〳〵夫婦を流れおろして「アレサ夫じやアいけませんヨ
さうやア私しが出るさうおあ祝のはお後とえばとしての
お明ぐろ〳〵なりをして内をこの出ませうがどうぞ神と云て
お美のさのヨ「私しが神とゆーしてゐてあうはめりとやうう
あやア半襟の赤木屋まいさ「何ア何やア私しい
内と駆出「徒死がちやんと抱てでぶいませんよ「そうやア
牧夫大変ご強欲の屋ちくでも絶対まてに愛えさい
私し一人のすうゝしてはあ内中の大騒ぎ「アレサたれな

ようどやアあきませんよ「そんな所へそうらうるゝ何を涙
紅う弟の平山を討で仇をやうるもの「アまアどうなる
さうなるとうわく私しやアないすを夫明さと実ふ歌
とんで居りまんのふ「さうなり歌とびどやアぶいませんよ
とけんむわるの抜抜ふお涙い涙時動へしが何ひけん
頬のあうりがし赤くさうり青て「夫どやア私しが嫌しい
とりふ実のお明と殺しまんがれ人ふうちやア居でれ
屋のまをヨ「そうやアどうしてかあさんのやかで私しふ知

らせてゆくるは如何があるまいなさるものどうしてくれるぞ
ません「そんなのねあの藤村の親方さんとでぜんどく
直「なるほどあるぶんどやアどぶいません郷は病又い大変ぞ
「なるほど九杯で第九は発近々近在ふ変るへは方支と晩
ふも何のふもとべ下るふ柔和な親方さん結構い勿
海花菱もあしづくら紙とりふすり紙ふは方いは戸の
内でもまア指杯とちのまきれね「あしそんなふは蕎麦
なのよ四ぶどうも出来なのよトちみ西へ見世の方工への

世話ふいたのあるとづまとふすきいろ〜ふ紙そろたん書紙ふ
は元ぐくのそどくしそんろはぶ糸とりふぶ〜のらうあん
見もすくくよけいとしまばろもちしの見よのさいこ
りのいけんとけんとのへうちあろいろのとり持とりるの見
里のふふりだろうふさあざやのろていろのくすぐりのたこ
所物下芝い蕎上田のた織のふふ羊羹魚の黒羽
二寸い甘味も接けて見ゆとども高波の利ぶ見ろ
方ふを知の物云はは知の出へとふにも利ゆべは浦屋

出世へとなせば時節には機嫌を雪に来りしかり
此物語に貞次郎とお滝の助は去消え失せと
悪人惣まとわり磨此噺のいろするや紀之滝の江
寂きと看皮大繁抱素にあれうし文六ぬ是喜次郎
は終殺鬼角の案じゆゑて瀬く此宮藤又と見べ
御月にあまき余ぬ毛様妹に心の浮きさね
月は見えられ乙家の中に出まかしと為て居るとぞえ
乳母にいざられ三郎は喜次郎が枕元より「おかゆ

おつちや〳〵ぼう〳〵といふまそ地をおようの「幸「落ち
おとつちやんとして〳〵へ藤をするか「も「おつき〳〵と小
さまてで読されるゆへ「幸「とまそんすし起ましやう
たゞあぶれぞうんでくりや「ぼう「ハイ〳〵どうぞごんあさ子の
おめざめさし〳〵これあようといふ内て入らつしやく
お柳はこゞまつてのまし「柳「多くは義母がおやしきへお
あづけ、お供まで三人来り妹うつしいつも闇がしうござ
いますればごろんのごようかわくへといふに喜次郎は笑ひながら

幸「ゑのさまの男でもわくのさ帳さとて〜せて黄ひてく
と掌とメさがゝ〜こるものぎきへくるとこゝ帝もよぢ
〜くる兎幸次郎がゝぐきなゞ〜えんぐひくで〜 抜べ
するものまふね 生のそうどやうで〜ゆく 絞田ゞ絞やら
女ゝもいゝぺゝきと 御〜〜まひせんどゞん比こゝ帝ハ
眠ゝきもびそびへね うせて 板のたにとうあぐゝ比ハよき
きりと〜 ありうさんへちよとゝくゝをむすんこめくうさん
おきちどうもい生まるうさどうでちうとのまこ〜ふ

居て下せへまり 杉「ヲイよとけるふ仮由答ひ社
幸猫ゝ上げて汐ゝ紙ハ見のひるる幸次郎今月
日又出る仕度ゝ小幕ゝ日ゝ紙入出ゝ ゝのゝら中
ゝうゝ揺返〜ゝゝゝ お八重の後ゝうそれと知
らぐゝ お柳いゝうこう 柳「おあきんふ比ゝこゝゝりゝ おゆめゆ
ゝいるゝゝがゝぐゝゝ生ゝゝ 幸「ゝゝゝゝ 柳「どうもゝふくゝ
幸「ゝゝゝゝ見ゝゝ見ゝゝ見ゝゝゝゝゝゝ 柳「そんるゝゝゝゝ
ゝゝいません 幸「そこて ゝゝゝゝゝゝ 柳「ヲ義兵のお八重

さんとるせに孫とお切れぐ文「私しの振る不糸
ゑる男い者ごとさ「ようく虚ゑと「芸実さ「いく
うそでぞいまん「り一ゑ実ふうそきゝ おのいまゝ物
振するきぞ「更でい私しの新ひもけいぐいうそちんき
でぞいまんうゝ「そそお八幡と孫がかきとそしんきと
いふ沢がゆてく「どうもゆきれませんよ「更でもゆメ
をうこうゝゆてくの「ゆこうとそお八幡さんの孫が
きつちゃゞいけませんとそもけいるめ方の周果と言うと

だうぐで俯て居る「おうゝるふぐ大きふ装弓糸ぐの
お八幡と孫が切れこうつて振弊音鉄もわく更でも
どういふ沢があぐ全辞お糸と女房ふうと義母も云
ひるまうさが宮あ「おおもれ和ぐらうのド与ゆまそけ
分い後ぐく「此振ゑゆゆ「しゝ「あゝの女と名ゑ生
せうが那方の振ゑ物「うゆ中分のおをるさゝるいけ方
孫うの物のとゆのでいぐぞいまうせんがあの私しいね一
生男と打まいと新ぐでぞいまんうゝ万一義母振

ゆうとを御と生れ居ませんかと
でございますんと思ひ切さ様の母人等次郎も
何まと紙のあと拾へとて月ふ遠りぬか柳の元茶
とかの門ふ立ち寄ーりよ「幸太郎」と拾ひ取めて元の
座の脇ーさと人待母が物と云ひて嫁礼いなれ
へよざか又丈まで思ひつかと私ひがあふ代内へどうして
貰ひまそ来さんざれ「サアそうけい」「どうそうんざ
「アか八幡さんと那方らい切てもきーとぬとい

源いお仲とゆまーと友丈を楽しーふつぎーとぬん
で貰ひまそ来ーさ「丈い私しふ拾てうーねよ
「そんなまつぞう脇ませうがなせか八幡さんを出
離縁拾べーまーと「今めふ為ふ私の拾を男と
丈婦ふなる家がわんとき「イエ丈いこを為遠ひで
どざいまんよ「どうーそを文為遠を「私しいきでんド
てかうまんよ「幸太郎を為遠と丈てくれ「正実ふまあ安い
そんドませんがお前さんうう頂さんへ内ーみてかう

なすつさか金の代を拵べしと有貞さんいあつ不そ
さいく　女そんが出来ないく地面も屋敷もさつぱりと売
金貴　掛ひそか金とお返しを旅て支くくそれに
戸ふ居てい人の新と又返さすも出来ないと純ふと
やく人かあ多ゆて良利出業どらやら支をいべ
私い生て居るのもうのいくらぶす根をのろふ
男の身のとおつく人沈らふ泡て「ハアそんなら貞
さんい純ふ居るさるうさそなと勧へてお来ぬ貞さん

の身のとそんなふ源く素どうのゴトらうとてあつと
きまが射けども根ゆのやるせる「私と貞さんい又浅
と米とやくそとらいきんくひお素どゆきん「そやア
ばんせを分源のごが支く貞さんの母私やお八宅の居るふと
お来い知つて居るさるう「イヽエ支い行の知ごろ居ません
支ものさう田舎とやく人いゆ知らがさとゆきんが支くい絶
て書伝ものく行の知ふお居ます居ん分ものさ田
食の代役居貞さんものさそらくと苦労ど拵いさ

らふとうつそ宮ら「幸そのまゝ」い紙ふ火るすうと「物」「私」の
乳母が氏るを渡来つゝ少まうゝさのさ「達」ゆゝお家の
うをいの不ふ張るく「物」「親」きさんの川快門ふ張兵義
てお直拵げま私の小さい時ゝお世話ふ嫌さ二家ものの
お母さんのお母さ各の和ふお世話ゆて居りまんが氏
ぬく来るゝ氏方の義母さ各の川嫁姫が西いうゝ
ちのぎ氏いうぎと宮るも少ふきりませんが寧死ん
ぎがきゝと考ふゆふるゝない女の子のとお家

さんとお八重さんいよりやい孫い切まきまいと氏
んぎ甲斐もなくおるさんまであるそのけとふ実
ふお切とるさるゝとい男といふものい悪らしいもの
でぎぎいまんト氣分の若男ふお八重の心とこ引双べ
てゆ眼ふ男を眼む一ト云も実ゝくて悪らさ
妻次郎い愛明友氏いつい貞次郎と怪しき中と拙
妻ふすまぎかゝうい面ふぎと貞次郎と来ゝ云ム
「幸」「物さ貞さんが陽氣氏ぶ来ゝ愛嬌さすよ

観音様
活眼開
詰能見
給へ
彼的
幸に
繼ぎ
于丹
代言

来る秋の
おとろへ
なり
の姿

二ツ龍絡セテ操正シキ無邪ナル於八重ハ離別シ為ニ支度ノ親子縁者

大方お八重と百姓屋へ行ていろ〳〵ばか禁んで居るのさお八重も又紙合先へ行こと云うて自分の仏さへ参ろうとあるて居りやア此花をとふ思ひ〳〵のさとゝふ所へ為ん所がイヤ其れ程ぬ〳〵ある〳〵せうとゝや「幸それ程い迷い所へお出さん」徳ふ嫌〳〵こうて居るさ所へ「イヤアお林〳〵ふ出さ〳〵あの仏云のう行ふ所へお出まん長婦人い迷い大ぶ彼の表が角京幸まらきすぎい迷ふて居ひ高つこう「又迷ることゝふよ迷ひ

果いよとゝふ為ふ奥のの仏様牧「ヘイ」「行ふ様ら人さ出て一杯出せとゝび行ろ「ヘイ畏こまりまゝさと点んとすると戻ゝ「今ふ自己も出そうゝ為お急のて繋と拵とげよ「ヘゝ〳〵と言て切「エお為あの時月の晩方拵いせさんざが紙拵ひて高沢りんざうゝ八氏の孫さの拵さ「イヤ宜うあの拵為附ふあい繋拵ふ為ま〳〵ふ宜うが〳〵で繋拵と浸ふのまう丸ぶ伸ま氏と元拵ぶ利ま氏ぶ〳〵れで

栄誉キリ 是アタリ宮呂 幸ナリ 的ヤ 向ヤ 悔八 八 尾ヨリ 及ブ マヽ 呼トヨ 呼可 謹察 此ノ道ナリ

所作が面白く気取されへこしト咄の内に看の悪さらに
お積は静かに側へ寄り「お銘に下為に疾人枝致て
身は気て居る者の悪さう「アヽ塩ちやんいらう致
しませうね「幸何にも能く続て居るうち若し自分の
咲うふと乳母に気取られて若て殿ましと云一下に云と渡
ふしてこゝに美人ならて綿の仲に美人は何の噺を
ふ其紙を渡し「幸 猶是は身の為が一寸御きさい「 京
ゑ 帰るゝに出て私しは其処へ往てよく心得て流

御ござお前さんは今夜は気兼して今の分限にね「素
細ごまと一下にとひのまへ下女を招出して吸物揃に致
し其積に向暮に出して気嫌の利月ある実をおく合の
小池屋「是は小銭の心をぞ集うね夫尾と海へし今夜の
方が法度の心ねくにをかの見るなど人目にも此振舞
ねでござりますねいや法様なら汁加減実に流されて
引きませぬ事多く一ツ目引お手ね実に今月の役目は
お為は此お暮にて其方出しに参りまするのでごんすね 幸「私しよう実に

大きな青物だよ摺みおろしたもので喰なせへよその節
味噌を田楽へつけて食さするなどうけのう為「あくりよ
時へなまぐさねあくひといふ間でござりましうけれへト此
の内ふ身を蒸ふ蒸より蒸て包で喰するや今こ千両稚
主出し為為のおふ茶を「此間かいへまいせん幸「マア夫でも
前へ出て汁がいく為「夫でも見じやアと唄けふかる幸「見さそ
我も出て汁なより飯のくさう汁は飯の不須合でも有て
まづ此家も此道と宗でも悪くぶ揃い為「夫は難有らう これと

ざいまんと鼻紙の入へ納まえてゐく為「さやうまう一刻も
はやく乗く参が先く参りて早さう幸「さうき変じやア夫から飯へ
乞のあう下郎を付さしせうう為「此く沢山皆を付まして
幸「夫じやア飯いよふうふヨ為「ある物卒知と眼七幹は奉公府
稲ゟみて猪を乳寄せ搾くて茶屋を喰ひ出れかまも
まふ夜とこさせて家族と見習幸「乳母や酒が大造よく様
みよ自己が出てうう跳しるよまく吸で云ひ付出かけるを
悪と情と一所為浅草の観音より直に向ふへ来る

のゐ屋の方へまゐりねもゐ屋いわきゝ之一孤家
横の元をよゝ先へ家へまゐり物うり支度
とゝしてお久を呼ゝとゝしてお久と二人が湯を出
ゐ屋の客の所のお爺が歌ゝ濱ゐの新吉の十七歌
物のお色歌が出ゝ手紙にゐる屋お久がやれ来ゝ見ゝ
お久恰今歌い為ゝ婚れごうゝ志つうゝ言ゝ
横らくるとゝゝ手紙をゐ屋ひごとお久をゝん
うお和うゝごうてゐゝないよゝ和うゝいまたゐひご

あんなゐまをあゝ支婦中ごうゝうけでのささうと
とゐつゝうんと濱村屋のおゐ武といふあんごのお久
ごうう見づの且那がゝ津の爺の米屋ごいやまと
あんな色人めわゝな男いうゝ働きいあるゝ色色
うゝてあうごけないとうふお病いゐゝ為性ご
濱のゝ北まゝう手紙先切の色男といふのゝ支
ふお八重さんご可愛らゝい見ゝゝいふ真ごあゝ
あゝうゝ言ゝ晒と行節ふうけゝといふ女ゝ支ゝ

ころすものを「紺屋の言ひ分のやうだね「ちきしやう
さぞ其れからお前の粋な丸くしてしくいておまへが出来
だらう今日もね吉原とて居なすつたよ「左様
なら「其れからお八重さんのお前に行かれあんまり心配
お前くしい娘が旦那と組の其の出かけと話して居なさるが
嫁にならうといふあまへお八重の足音「ちつと紋
でとふさぐ

花月二編下之巻終